

元気な日もあれば、病に倒れる日もやってくる。一番誰かに助けてほしい時に、素直に自分の弱みをさらけ出せないことって、ありませんか。そんな気持ちをくみ取り、さりげなく寄り添うボランティアの活動に、新しい「家族のカタチ」が見えてきます。

自遊時間

Time Is On Your Side

病児の母に寄り添うおふくろの味

坂上 和子さん(64)



「お母さん食堂」の目の坂上和子さん。ほぼ毎日通う事務所は通称「ハウスグラマ」。自身も孫が2人いる。東京都新宿区若松町

「今日は『お母さん食堂』の日。どこのコンビニのまねじゃないからね(笑)」
2月下旬の土曜日、午前10時過ぎ。東京・若松河田駅からすべの、古いマンションの狭い台所で、あねさんかぶりにかっぱ着の坂上和子さん(64)が手際よく動く。
野菜を刻み、魚介類にパン

粉をつけて、下ごしらえは完了。ひじきが煮えて、エビやカキのフライが揚がったところに、ご飯も炊けた。使い捨て容器に盛り付け、みそ汁と一緒に近くの大病院へ。昼前、この弁当は、小児病棟で我が子に付き添う母親2人に届けられた。1食250円。
「ベッドから離れられず、

自分の食事なんて構っていられない人も多いの。たまには栄養のある『おふくろの味』を食べさせてあげたくて」
弁当作りは昨年2月から、自ら代表を務めるNPO法人「病気の子ども支援ネット遊びのボランティア」の事務所週2回行う。土曜日は、ご飯とおかず3、4品で、最

多10人分を手がけたこともある。火曜日は、おにぎりとお餅程度で1食100円。いずれも格安で提供している。
もともとは保育士。1991年以降、近くの病院に長期入院する子どもの元へ、おもちを持って訪ねる支援活動を続けている。次第に気がかりになってきたのが、保護者のこと。最初は遠慮がちだが、打ち解けるに従って、しんどの日常が伝わってくる。
毎食、カップ麺や菓子パンなどに偏っていたり、食事制限された子どもの前では好きな物を口にできなかったり。プライバシーのない大部屋でストレスをため、自宅の家族には後ろめたく、何より我が子の病状のことで追い詰められている。そんな親たちに、前日夜までにLINEで申し込まれた弁当を届けている。
「ママが笑うと、子どもも笑う」。弁当には、そんな走り書きをしたメモを必ず挟む。「ここをおばあちゃんちだと思って、いつでも気軽に頼ってほしいの」